書かれないこと

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
書かれないこと

【Ｎコード】
Ｎ９６１５Ｍ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
飛鳥時代のある事件についてのお話です。真実は今も闇の中にあります。

第一章

書かれないこと

確かにであった。この方は叔父を憎まれていた。

叔父は権勢を持ちこの方をないがしろにされていた。しかし憎まれていたのは叔父だけではなかった。

「全くもってだ」

「どうされました？」

「常に思うのだが」

こう親しい側近達にこぼされるのだった。

「私は帝だ」

このことを言われるのである。この方の御名を崇峻帝という。言わずと知れたこの国の帝であられる。そのことは本当に言うまでもない。

しかしだった。帝には実権はない。それが帝にとってはよいことではなかったのだ。

「だがその私が何故だ」

「ですがそれは」

「言われぬ方が」

「それはわかっている」

帝は側近達の言葉にまずは言葉を収められた。しかしまたすぐに仰った。

「実はだ」

「実は？」

「何なのでしょうか」

「叔父上のことはまだよいのだ」

こう仰るのである。

「叔父上はあれでも私のことに気を使ってくれている」

「左様です、帝の御即位を支持してくれましたし」

「何かと献上もしてくれます」
「ですからあの方はあれでも」
「私を立ててもくれている。だからまずはいい」
彼はいいと言われるのである。
「だが」
「だが？」
「どうだというのでしょうか」
「私の帝としての地位は安泰ではない」
帝の御顔が急に曇ったものになられた。
「何時どうなるかわからない」
「それはまさか」
「あの方々が」
「何かあればすぐに知らせてくれ」
こう側近達に仰るのである。警戒する御顔でだ。
「よいな。特にあの女にはだ」
「あの方ですか」
「あの方を最も、ですか」
「あの男も気になるが」
帝は御声も警戒されていた。それは叔父について語る時と全く違っていた。明らかに命の危険すら感じられているものだった。
「まずはあの女だ」
「ですがあの方は」
「女の方です」
「流石に帝を害されるとは思えないのですが」
「どうなのでしょうか」
「油断してはならぬ」
しかしであった。帝は警戒の色を緩めておられなかった。その御顔は険しいまでになられそのうえで申されるのである。
「絶対にだ」
「では、ですか」

「あの方を」
「目を離すな。よいな」
「はい、わかりました」
「それでは」
側近達は帝の御言葉に頷いた。帝は明らかに警戒されていた。
そしてだ。その時である。ある場所において三人の男女がいた。
一人は初老の男であり恰幅がいい小柄な身体をしている。一人はすらりとした端正な青年である。最後の一人は美貌の初老の女であった。
三人は女を中心としてだ。それぞれ話していた。
「それでは」
「はい、どうやら帝は」
若い男が女の言葉に応えていた。
「我等のことに気付かれています」
「左様か。やはりな」
「帝も愚かではないということです」
「それでは」
女は若い男の言葉を聞いてだ。ここであることを言った・
それは何かというとだ。女は言った。
「剣か」
「お待ち下さい」
しかしであった。ここで初老の男が言ってきた。怪訝な声である。

第二章

「帝をですか」
「何の不都合がある？」
女は平然として彼に言葉を返してきた。
「若し帝に対して何もしなければ」
「その時は」
「我等がやられる」
そうなるというのである。
「そして帝がおられなければ」
「だからですか」
「ならば答えは一つしかない」
こう言うのである。
「そうじゃな」
「しかしです」
初老の男は怪訝な声で言う。部屋の中は暗くその顔はどれもはっきりとは見えない。しかし三人共互いがよくわかっていた。
「それをされては」
「どうだというのか」
若い男が彼に問うた。
「それで」
「まず何を言われるかわかりません」
周囲の評判を気にしての言葉である。
「それに」
「それに？」
「後世で何を言われるか」
彼はこのことも気にしているのだった。声にそれがはっきりと出ている。
「そうしたことを考えますと」

「できぬというのだな」
「ここは少し柔らかにすべきです」
「柔らかというのか」
「そうです」
そうするべきというのである。
「帝の魚警戒を解かれそのうえで時を見て譲位を得られれば」
「駄目だ」
「それはもうだ」
しかしであった。彼の言葉は二人によってすぐに否定された。
「その時ではない」
「最早動くしかない」
二人はこう言うのである。
「だからこそ」
「剣だ」
「左様ですか」
「そなたには今までの地位を与える」
「そなたの一族もだ」
二人は初老の男に対してこうも告げた。
「わかたな、これで」
「それでよいな」
「わかりました」
初老の男もここで遂に頷くのだった。
「それでは。その様に」
「よし、これで決まりじゃな」
「はい」
若い男は女の言葉に頷いた。
「それではその様に」
「そなたには私の手伝いをしてもらう」
「御意」
こうして話は終わった。この密談の後で帝は狩の獲物であった猪

を御覧になられた。その時にふとこう仰ったのである。
「よい猪だな」
「はい、確かに」
「見事な大きさです」
側近達も帝の御言葉に頷いた。
「では召し上がられますか」
「この猪を」
「そうさせてもらう。だが」
ここでだ。帝はある二人のことを思い出された。そうしてそのうえでこうしたことを仰られたのであった。
「しかしだ」
「どうされたのですか？」
「一体」
「この猪の首は何時でも斬ることができる」
その猪の首を見ての御言葉である。
「しかし斬りたい者の首を斬れればな」
「帝、それは」
「その御言葉は」
側近達は慌てて帝の御言葉を止められた。

第三章

「その様なことを仰るのは」
「お止めになられた方が」
「わかってはいる。しかしだ」
帝は憤懣やるかたない御顔で仰るのだった。
「まことにそうしたいものだ」
こう仰られていたのは確かだった。そしてこの話はだ。
あの三人の耳にも入った。そうしてであった。
また密室で話し合っていた。暗がりの中で顔を見合わせてである。
「左様か」
「それはまことだな」
「はい」
初老の男が他の二人に述べていた。
「帝は確かにそう仰っていました」
「ふむ、わかった」
「そういうことか」
そしてであった。二人は彼の言葉に対して頷いた。
そのうえで、であった。男が女に対して言ってきた。
「ここはです」
「時が来たな」
「そう考えます」
こう述べるのであった。
「如何でしょうか」
「わかった」
女は男のその言葉に頷くのだった。
「それではだ」
「そうしましょう。それでだが」
「はい」

男は今度は初老の男に顔を向けた。初老の男もそれに応える。
「こちらからなのですね」
「そうだ。手筈は整っているな」
「それはそうですが」
しかしであった。ここで初老の男はだ。暗い部屋の中で苦い声を出すのであった。
そうしてであった。こう言うのである。
「ですがそれは」
「駄目だというのか」
「帝です」
言うのはこのことだった。
「ですから。それは」
「先も申したであろう」
「そうじゃ」
しかし男と女の声は強いものだった。
「だからだ。それはだ」
「帝がそう思われているのならだ」
「こちらから先にやるまで」
「そして私がだ」
「そうですか」
初老の男はその言葉を聞いてであった。まだ思うところがあるようだがそれでも頷くのだった。
「わかりました。それでは」
「すぐにだ」
「いいな」
「わかっております」
こうしたやり取りがあった。だがこのことは誰も知らなかったし気付かれなかった。そうしてであった。
帝は暗殺された。そしてすぐに葬儀が行われ後には異母姉であられる額田部皇女が即位された。推古天皇である。本朝最初の女帝で

あられる。
その摂政として厩戸皇子が就かれた。近年では実在が疑問視する説もある聖徳太子である。この二人が蘇我馬子の補佐を得て政治を行うことになった。
以上のことは歴史にある通りである。帝の暗殺は蘇我馬子の手によるものとされている。しかしそれが事実かどうかというとだ。
真相はわからないと言っていい。藪の中である。ただ一つ気になることがある。
蘇我氏は彼の息子蝦夷や孫の入鹿の時にその権勢をさらに高めた。その時に山背大兄皇子の一族を滅ぼしたがこれを恨まれたのと口実にされて蘇我氏の嫡流は滅ぼされてしまった。大化の改新である。これも歴史にある通りだ。
そして飛鳥時代後期は皇室同士での権力闘争が多くそれにより命を落とされた方々も多い。だが皇室の中の争いには臣下は何もできなかった。
以上の歴史的事実がある。そうしたことを踏まえると帝の暗殺は果たして蘇我馬子が主犯だったのかどうか疑わしいと見ることもできる。そして後に即位されたのは推古帝であり摂政になられたのは聖徳太子である。これは事実である。歴史書はこのことについて詳しいことは何も言いはしない。だが真実が書かれているとは限らない。真実はどうだったのか今では知ることは非常に難しい。しかし歴史的事実からある程度は読み取れることはできるのではないのか。こうした考えを出したところで筆を置くことにする。

書かれないこと　　完

２０１０・２・５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9615m/

書かれないこと

2010年10月8日13時44分発行